



Title	Studies of the Fantastic Boundary in Oscar Wilde and Marie Corelli
Author(s)	桐山, 恵子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45706
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	桐山 恵子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19131 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	Studies of the Fantastic Boundary in Oscar Wilde and Marie Corelli (オスカー・ワイルドとマリー・コレリにおける幻想的境界についての考察)
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暉 (副査) 教授 森岡 裕一 助教授 服部 典之 助教授 片淵 悦久

論文内容の要旨

本論文は、イギリス 19 世紀末文学を代表する作家オスカー・ワイルド (1854-1900) とマリー・コレリ (1855-1924) の主要小説作品を取り上げ、その物語世界においてリアリズム的世界の中にファンタジー的要素がいかに浸入しているかを検証することを通して、現実と非現実の二つの世界の境界線が揺らぎ始めている現象を指摘し、その意味を考察した研究である。さらに、ワイルドとコレリに加えて、世紀末の他の童話作家やクリスティーナ・ロセッティ、チャールズ・ディケンズ、ロバート・ルイス・スティーヴンソン、ブラム・ストーカーらの物語作品にも言及し、このリアリズムとファンタジーの混交をそのありようと発展過程に注目することによってより広範な視野から検証している。本論文は、英語で書かれ、その全体は、序論、9つの章、結論から構成され、本論、注、参考文献を含めて、A4判で計 207 ページから成っている。

序論は、世紀末文学におけるリアリズム的世界とファンタジー的要素の混交と相互浸入について、先行研究を踏まえてこの特徴のもつ重要性を強調する。第一章は、ヴィクトリア朝の代表的童話の中からメアリー・ド・モーガン、フォード・マドックス・フォード、ディケンズらの作品を取り上げ、プリンスと結婚しない女主人公の登場に注目し、童話における伝統的慣習の揺らぎを指摘する。第二章と第三章は、クリスティーナ・ロセッティの『ゴブリン・マーケット』とマリー・コレリの『不思議な訪問』を取り上げ、ロセッティの描く人間と敵対する邪悪なゴブリン(悪鬼)と、コレリの描く人間の現実社会のなかに生きる文明化されたゴブリンとを比較対照し、後者のような新しいタイプのゴブリンが現れた意味を考察する。第四章は、コレリの『不思議な訪問』をディケンズの『クリスマス・キャロル』と比較することにより、コレリの描く超自然的存在のゴブリンが現実界に侵入し、一方人間である主人公が非現実世界・ファンタジー界に足を踏み入れる物語の展開に注目し、ここに二つの世界の「境界」の消失を指摘する。第五章と第六章は、オスカー・ワイルドの代表作『ドリアン・グレイの肖像』と『アーサー・サヴィル卿の犯罪』をゴシック小説として読み直し、前者では悪魔が登場していないこと、後者ではアーサー卿は危険なモンスターを退治したヒーローとしての機能をもつことを指摘し、現実と非現実世界との明確な「境界」が不透明になっている意味を考察する。第七章は、コレリの『サタンの悲しみ』を取り挙げ、超自然的存在のサタンがダンディな紳士の銀行家として世紀末ロンドンに登場し、その存在が商品化されて表象されるという特徴の意味を考察している。第八章は、ワイルド

の『ドリアン・グレイ』を都市小説と捉えることを通して、ここに描かれるロンドンが都市を徘徊するフラヌール、収集家、書物として表象されるテキストであることを説き、都市としての実体性の希薄を指摘する。第九章は、ステイーヴンソンの『ジーキル博士とハイド氏』、ストーカーの『ドラキュラ』を取り上げ、これらの主人公たちの登場は死という終りの不可能性、終結に対する不確信を前景化するモチーフを孕んでいることを解き明かしている。最後に、物語におけるリアリズムの世界とファンタジー的性格の融合こそ、イギリス世紀末文学を豊かにする大きな特質であったことを強調して結論の章を締めくくっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス 19 世紀の後期ヴィクトリア朝文学を研究対象にして、その代表的作家であるオスカー・ワイルドと、これまで本格的にあまり研究されることのなかった女性作家マリー・コレリとを同一の文学的地平に位置づけることにより、世紀末文学の重要な特徴としてリアリズム的文学とファンタジー性との融合・相互侵犯の関係を解き明かすことを試みた意欲的な研究である。この二つの文学的傾向の融合については、本論は、世紀末期の他の作家たちの多くの作品を考察対象に取り上げることによって、幅広い視野からの検討と、さらにヴィクトリア朝中期から後期にかけてのイギリス文学の展開の把握が可能となり、そのため、より一層の説得力を得るのに成功している。特にワイルドの主要小説作品『ドリアン・グレイ』と『サヴィル卿の犯罪』をヴィクトリア朝ファンタジー文学とゴシック小説との関わりにおいて読み直すことにより、ワイルド文学におけるファンタジー性のもつ重要な意味を説き、世紀末文学の新たな特質を掘り起こしたことは注目に値する。さらに、コレリのともすれば大衆的小説として軽く見られがちであった『サタンの悲しみ』、『不思議な訪問』などの代表作を、ディケンズ、ロセッティ、ワイルド、ステイーヴンソン、ストーカーなどからなる後期ヴィクトリア朝文学のひとつの大きな文脈の中に位置づけることに成功したことも高く評価できよう。文学作品の分析に当たって、類似性ないしは同質的傾向をもつ他の作品との比較対照の巧みさと、文学テキストの細部を読み解く鮮やかさも特筆すべきであろう。

本論文は、このような優れた研究成果であるにもかかわらず、問題点がないわけではない。まず、現実と非現実、リアリズム性とファンタジー性からなる二つの世界の「境界」の表わしている内容が必ずしも明確であるとは言えず、ときに次元の異なる議論が混線して展開することがある。論のどこかでその概念の輪郭、領域、次元を整理しておく必要がある。また、ヴィクトリア朝における文学的傾向と時代的感性・趣味・世界観との相互関係性についての考察がやや短絡的に流れる傾向があるのも気になるところである。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。